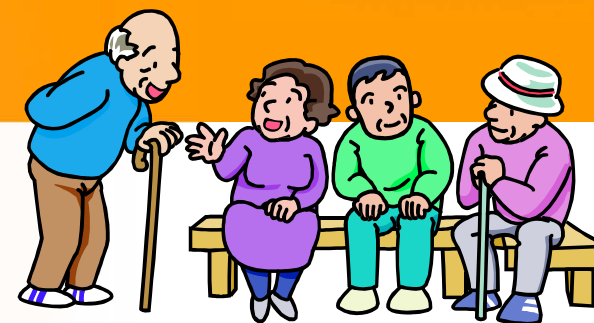




【第10回くらしの足をみんなで考える全国フォーラム2021】
～ オープニングトーク～

「地縁が創る新たな交通 視点を変えると見えてくるもの」



南房総市役所 畠田紀之

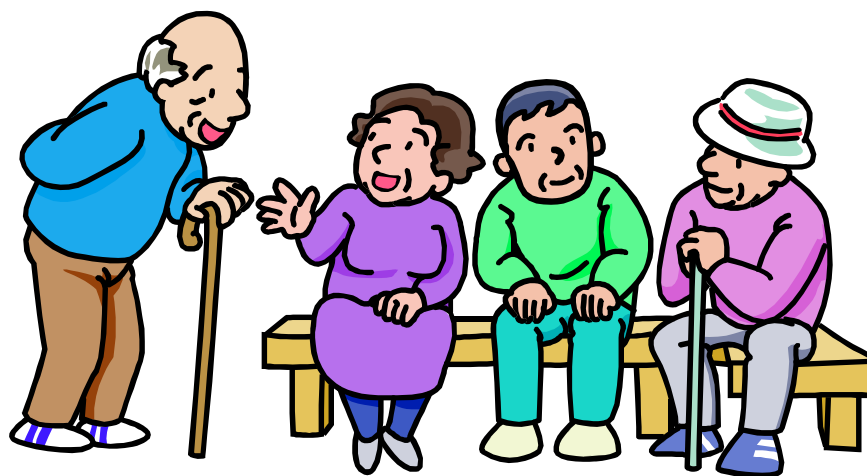
国土交通省関東運輸局地域公共交通マイスター



公共交通担当から **違う** 視点で気づいたもの

地方は

～ 交通政策視点から、市民協働視点で ～



南房総市の概要

千葉県南房総市 平成18年3月20日合併



(富浦町・富山町・三芳村・白浜町・千倉町
丸山町・和田町 6町1村による新設合併)

面積 230.10km² (可住地面積 106.6km²)

人口 36,431人

世帯数 17,550世帯

高齢化率 46.3% (過疎地域指定)
(千葉県内第3位)

財政力指数 0.31 (※3カ年平均)

経常収支比率 90.4%

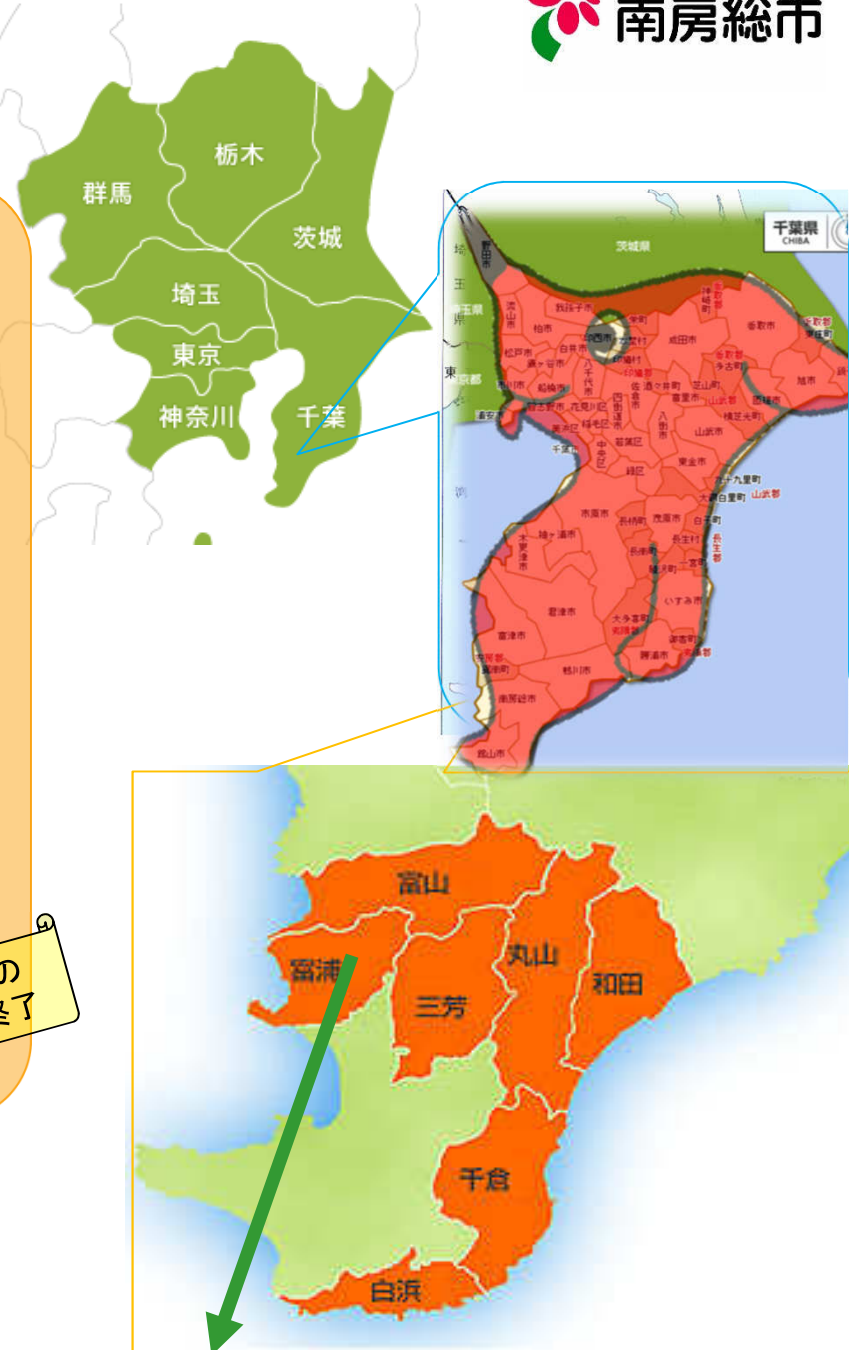
公債費負担比率 18.7%

合併に伴う地方交付税の
財政措置はR2年度で終了

※ 人口、世帯数、高齢化率は令和3年10月1日現在

※ 高齢化率 = 65歳以上人口 ÷ 総人口

※ 財政指標等は令和3年度決算状況

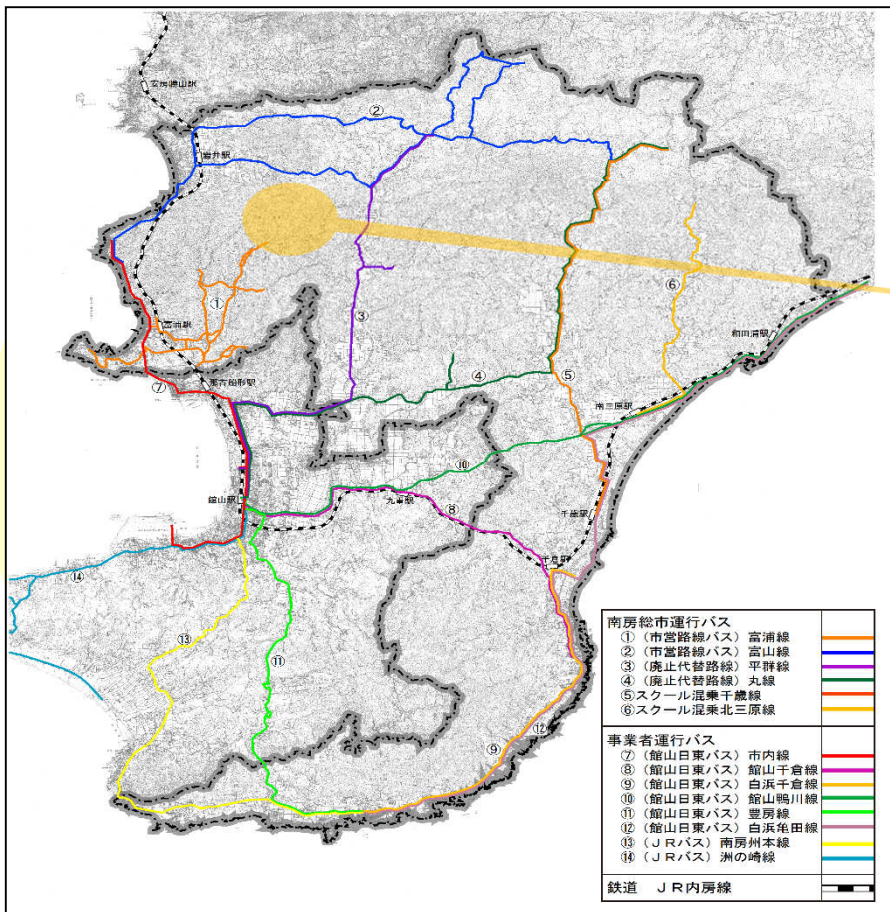


南房総市富浦地区(大宮区)の概要

- ①世帯数: 145世帯 (R3.10.1)
- ②人口: 311人 (R3.10.1)
- ③交通事業者: なし
- ④店舗・飲食店: なし

ちなみにR2年度
イノシシ捕獲数は
139頭

南房総市富浦地区(大宮区)は
山間僻地にあり、高齢化率は50%超



航空写真で見ると一目瞭然（山間僻地）

典型的な山間僻地

スーパー、小売店、飲食店なし

可住地面積は極狭

人口: 311人

世帯数: 145世帯

高齢化率: 50%

▽77大座標: 2476.00258 - 103804.452

頼みたくても「事業者」がない状況が現実

#1 路線短縮・系統廃止 路線再編の前に経営再編



#2 バス会社も大きな組織「人」が変わると考えも変わる ↘

#3 バスには運行補助制度あり タクシーにはなぜ補助がない

#4 タクシー会社が**廃業** まちからタクシーが消えた

#5 短距離の移動でも迎車料金プラスで高額



#6 コロナワクチン接種が始まり需要が集中発生

市がタクシー券配布も、需要が一斉に重なり配車できず

#7 いざ利用したい時に、頼める相手先がない状況

頼める先がなく、自ら立ち上がらなければならなくなり…

移動手段がなくなった さあどうする

● どうやったら自主運行することができるか

自主運行が最後の選択肢

貸切チャーター
の相談するも
貸切事業者と
は折り合いつ
かず

● バスもタクシーも頼める相手がいない

移動難民、買物難民
医療難民・・・おでかけ
だけの問題ではない

移動手段がない、地域内に商店もない

運行費を地域資源でねん出できないか

- 地域にある資源で必要なものを自分たちで稼ぐ

高齢者の耕作放棄者には援農支援として一役

荒廃地問題(有害鳥獣、雑草)解決にも

- 高齢化により耕作放棄された農地を利用、栽培出荷し、運行経費をねん出したらどうか

都会では農業栽培をするには土地を探すのが難しい・・・田舎なら・・・

都会は交通手段が豊富にある。
田舎は使える土地(農地)が豊富にある

地域資源から運行経費をねん出する方法とは

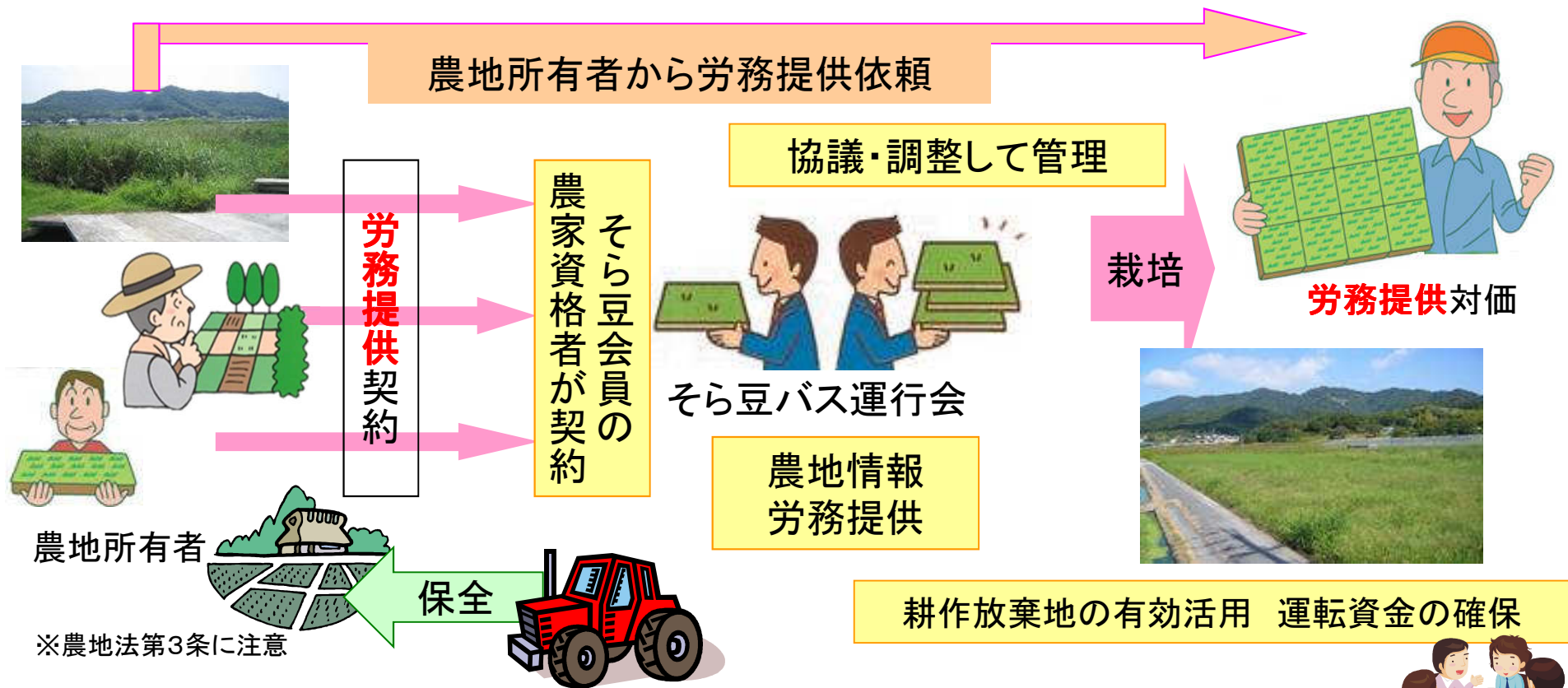
高齢化等の事由がある耕作放棄地を利用し、会員が**労務提供**しそら豆を栽培・出荷し資金をねん出

(内容)

- ①所有権移転や貸付契約ではなく、農地所有者から労務提供依頼での契約
- ②農地法第3条に抵触しないよう、農業委員会へ事前説明
- ③農地所有者を代理して、そら豆バス運行会の農家資格者との労務提供契約
- ④委任を受けた農地は、所有者の希望により会員みんなで保全管理を行う

注意

- ・農地法第3条
- ・遊休農地の所有状況
- ・農地中間管理事業の活用



※農地法第3条に注意

会員ができることを(雑草取り、水やり等でも可) 栽培に関わることで勤労奉仕=**利用料**



富浦地区大宮区 そら豆バス（地縁運行）活動とは



活動目的

「地域の高齢者のおでかけ機会の創出」及び「生きがい・交流機会の創出」による健康長寿の実現

活動内容

地域の高齢者が、耕作放棄地を無償借用し、そら豆を育て、出荷し、種代を引いた分をバスの燃料費にし、予め運行日を決めて近くのスーパー（買い物）や診療所（ドクターチェック）へ運行を行っている。
また、バスの運行だけではなく、シルバー農園やウォーキングなど、複合的にさまざまな取組を行い、外に出る機会を創出している。

『高齢者の生活維持』

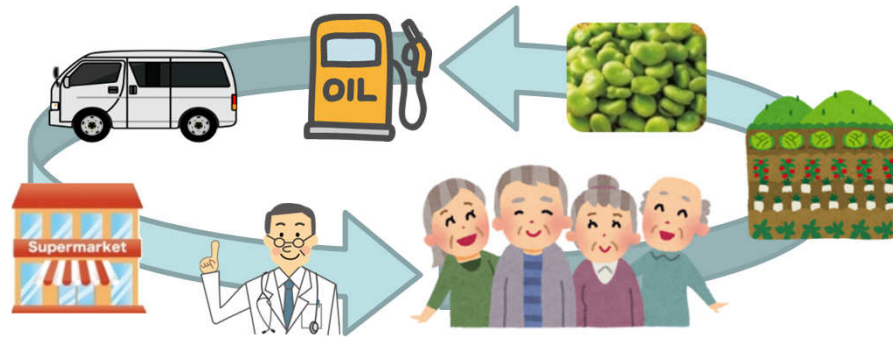
- 運行日にはショッピング & ドクターバスの運行
スーパーで買物、診療所で健康談話、コミセンでお茶会
- 春と秋に会員全員の交流親睦会の実施
自分たちで育てたコスモス・桜の花見の会

『高齢者の健康維持』

- シルバーガーデン（高齢者自給農園）の推進
- ウォーキングの推奨

『高齢者の社会参加』

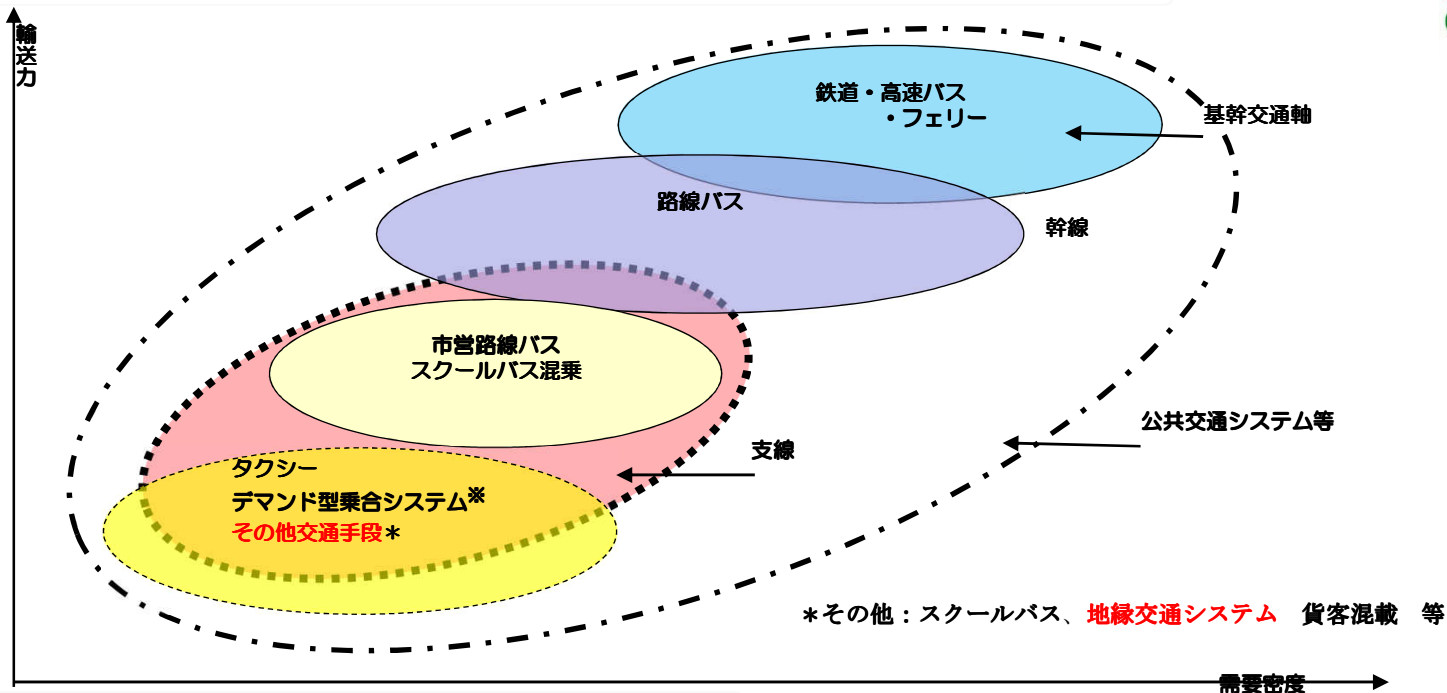
- ウォーキング中のゴミ拾いによる環境美化
- 田舎道にコスモスを育てることによる故郷の美化



模範は16世紀イギリスのヨーマン(Yeoman)独立自営農民

地縁による自主運行は利用客を取るのではなく、次の利用へつなげるための新たな交通

■ 輸送力と需要密度との関係による各交通システムの位置付け



■ 地域が主体となる地域交通実現に向けて

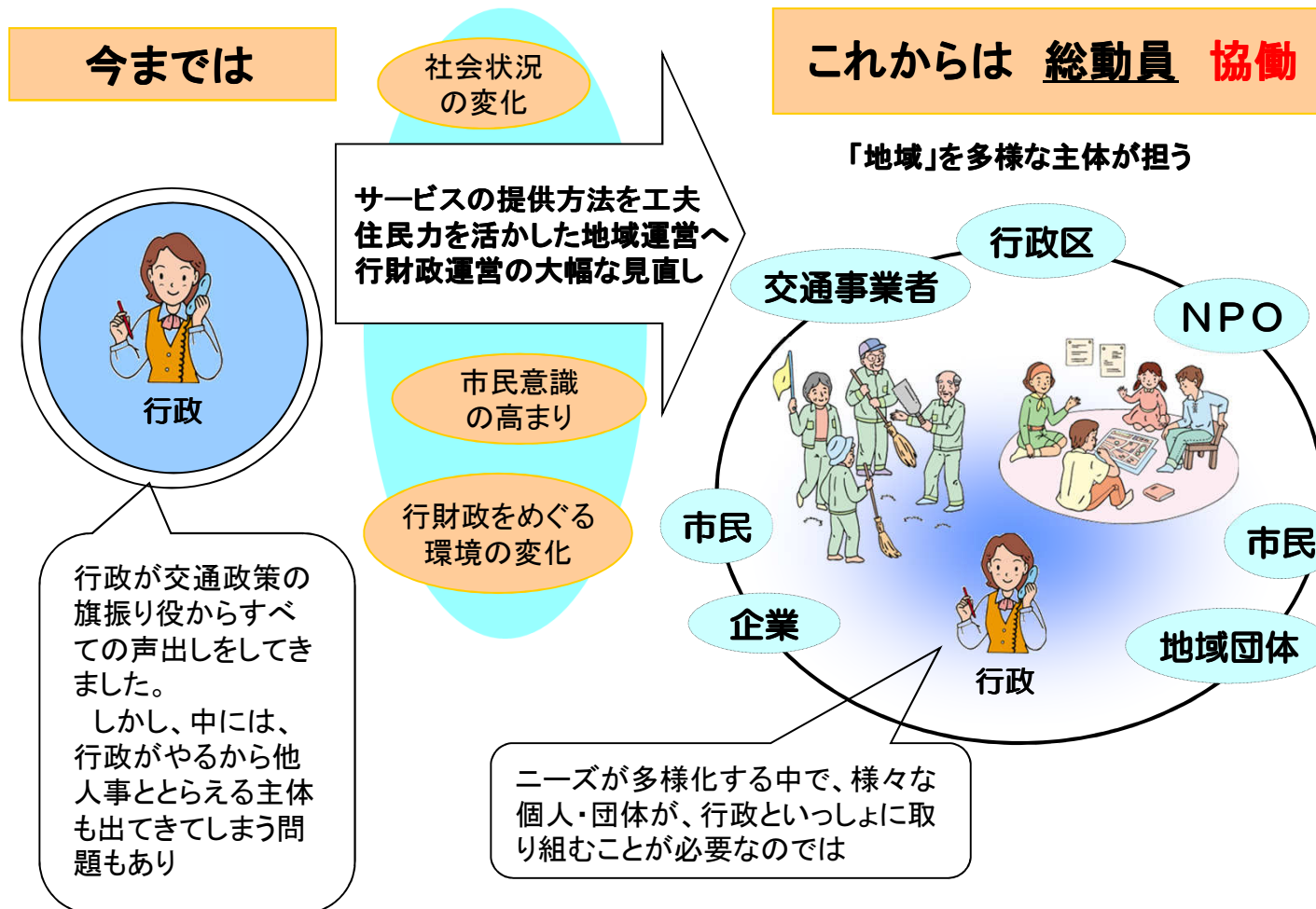


公共交通政策と、地縁による自主運行の違い

- 毎日運行しなくたっていいじゃない（無理・背伸びをしない）
- 必要な時、運行機会に利用者の予定を合わせてもらう
- 運行経費は活動費で その都度運賃は支払わない（もらえない）
- 活動の成果で運行回数を決定（自分たちの力の限度内で）
- **バスはあくまでひとつの手段 目的は高齢者の健康維持**
- 高齢者直営地シルバーガーデン（翁直営地）の促進
- 逆境だからこそ楽しみながら活動（何らかの形で関わりを持つ）
- できることをやる 無理をしてまでやらない（運行、作業）
- 移動だけでなく、自立して暮らせる仕組みづくり
- 自主運行は山間僻地で、高齢者社会のしのぎ方
- 運行形態は乗合（4条）というより貸切チャーター（21条）に近い

視点を変えて考える 地域みんなで取り組む必要あり 協働による公共交通政策

これまでの公共交通政策は、そのほぼ全てを行政と交通事業者が中心で行ってきました。しかし、世の中の社会情勢や人々のライフスタイルが変化の中で、皆さんの納得のいく公共交通を提供していくためには、行政と、交通事業者だけでなく市民の皆さんが**一緒に取り組んでいくという新しい手法が必要**です。もちろん行政側もそれにあった形への改革が求められます。



山間僻地の生き残り窮余の一策

地域にある課題同士を結び付けて



山間僻地 外出の自由をいっただよ



大豆の苗を手にする
市井の農家



大豆の苗を手にする
市井の農家



市民がつくる交通
最期まで自立して
生きるために
そら豆バス「山間僻地専用車両」

そら豆を
自主生産に
取り組むと、
もともとある
山間僻地の
資源を
活用できる



池原を
楽しみにしている
大豆の苗を手にする
市井の農家

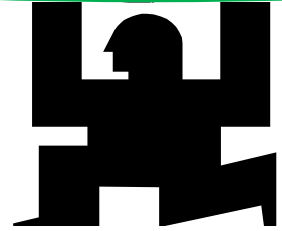


1999年 朝日の夜219号 14

15 2014年 朝日の夜219号



耕作放棄地
雑草近隣問題
有害鳥獣問題



地域のお年寄り
「誰も孤独にさせない」

地域資源を活用した新たな取り組み

そら豆バス (運行費確保：播種)



そら豆の種豆

(そらまめバスのマメ知識)

そらまめは、さやを天に向けて実るので
”空豆”とも、蚕が作るまゆの形に似ている
から”蚕豆”とも書くこともある。

バスを利用する方々が何事も“上向き”で
あってほしいとの願いがあるとのこと。



耕作放棄地を地権者からの
依頼で会員が集まって
耕作し、種蒔き (労務提供)

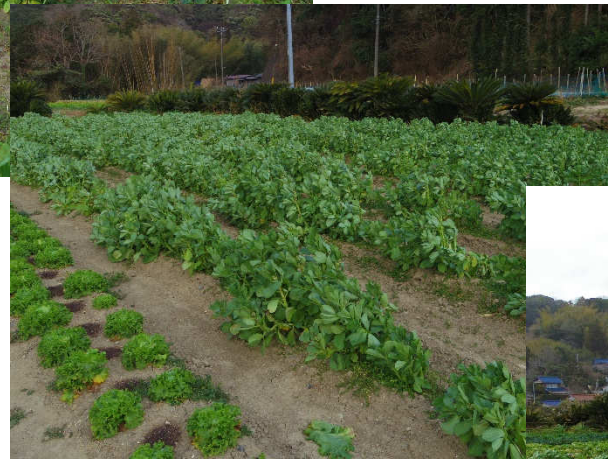


そら豆バス (運行費確保)



そら豆は5月に出荷予定

出荷量と収益により運行回数を決定



大相撲夏場所(5月)になぜか起こる

そら豆「夏場所大暴落」

この時期は出荷価格を要チェック

そら豆バス（買い物）



買い物もみんなできいっしょに楽しく
せっかくのおでかけだから
ほんのちょっぴりオシャレして
人と会うのもひとつの楽しみ

不足しがちな野菜や
動物性タンパク質など
必要なものたくさん買っても
トランクがあるから大丈夫



そら豆バス（遠足気分）



たまのおでかけ 買い物のあとは
コミセン(足湯)に立ち寄り 遠足気分



人とおしゃべりするのも
高齢者にとっては大切なこと
いろいろな刺激をうけるらしいです

そら豆バス (Drチェック)

ドクターチェックは、市内の診療所へ
赤ひげ先生とおしゃべり雑談
(集団的ホームドクター制)



午前、午後の診療時間の合間に
みんなでちょっと立ち寄り
健康不安の解消に 安心できます

そら豆バス（お花見）



耕作地の畔にコスモスの種を蒔き
地域の景観づくりにも貢献
雑草取りも大事な仕事
高齢者にとって地域で役割がある
ことはとても大事なこと

花が咲いたらみんなでお花見
みんなで育てたコスモスロード
自然と笑顔がこぼれます



地域が自立して生きるための取り組みのカギ

交通維持困難地域における住民による自主運行



区域内にバス、タクシーが存続できないだけでなく、車両・事業者すら存在しない公共交通維持困難な区域

↓
「地域の足の確保」と「地域づくり」を市民協働の観点から検討



地域には必ず「キーマン」が存在する！
地域の良き理解者なら状況は必ず好転する

地縁交通（通称：そらまめバス）

健康 + 交通 = 幸通

- ・休耕田や耕作放棄地を借り「そらまめ」を栽培
- ・栽培した「そらまめ」を出荷し、苗代を差し引き…
運行費に充て、自主運営による運行を実現

↓
外出機会提供だけでなく自立的小コミュニティの実現



前期高齢者が
後期高齢者を
支える仕組み



成功のカギはキーマン発掘ができるか

地域の中に必ずいる「キーマン」を見つけ出す



地域のことは、行政ではなく、誰よりも地域の方がよく知っている



地域課題をどうしたら良いかの知恵やアイデアもたくさん秘めている

行政が答えを用意するのではなく はじめのキッカケと有効資金を用意

・行政が最初から答え(対応策)を用意してもそれは行政サイドのいいなりになりかねない
運用する人たちの気持ちがいなければ持続しない



移動手段の確保だけであつたら、地域の賛同者を巻き込むことはできなかつたかもしれない



☆地域の見守り隊長



移動問題だけでなく
福祉、医療、環境
限界集落最後の
生き残り戦術

そら豆バス(地域自主運行バス)の特徴

- ①動かしながらの制度設計(そら豆バスの運行は手段のひとつ 地域づくりが大きな目標)
- ②地域に力があるうちに、行政に人も金もあるうちに・・・(やるなら今しかない)
- ③地域の基盤を整える(行政に頼りすぎず 前期高齢者が後期高齢者を支える仕組み)
- ④まずは、楽しく話し合う場をつくることから(世代を超えた話し合う環境の提供)
- ⑤自分たちで出来ること、行政でなければできないことを明確にする(役割明確化)
- ⑥そして活動へ (生活実態の中から課題を見つけ、出来ることからはじめてみる)
- ⑦情報を積極的に発信する(地域での認知 無関心に関心に変えるおせっかい)
- ⑧公共交通から地域づくりの総合プロデューサーへ・・・(地域の連携調整・情報の集約)